

Transformation and Actuality of Manchu's Kinship Organization

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46152

満族の親族組織の変化と現状

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

張 琳

要旨

本稿は、新賓満族自治県下房子村における満族の親族組織に焦点を当て、中華人民共和国成立以降の社会的変遷に伴う親族組織の実態を明らかにし、また、今日の新しい動きについて検討する。満族は1950年代から長い間、土地改革、文化大革命、改革開放など一連の歴史的変遷を経て、親族組織には激しい変化が起こった。新しい社会環境において、政治的、経済的な面から影響を受け入れ、親族関係は次第に疎遠になりつつ、昔のような大規模な祭祀はほとんど行われないようになった。

本稿では、調査村の一家族である図家の事例を、親族組織が如何なる変化を経て、今日の様子に辿り着いたかを示す具体例として呈示する。また、2000年以降、図家において大規模な祖先祭祀が再開され、族譜の複製、続写する動きが見られた。その際に、祖先祭祀は親族関係を強化する一方、家族の私的儀礼に止まらず、民族文化の重要な一部と見なされるようになった。今日の満族社会において、祖先祭祀は新しい機能を果たし、親族組織にも今後の可能性を提供している。

キーワード

満族、親族組織、変化と現状

Transformation and Actuality of Manchu's Kinship Organization

ZHANG Lin

Abstract

This paper focuses on the current situation and new dynamics of Manchu's kinship organization since the establishment of the People's Republic of China through the case of Xiafangzi Village in Xinbin Manchu Autonomous County. Since the 1950s, Manchu's kinship organization has changed drastically because of a series of political reforms such as agrarian reform, the Great Proletarian Cultural Revolution, and Reform and Opening. Typically, political and economic influences in the new social environment gradually estrange the relationship, and large ceremonies are rarely held.

Based on the results of a survey, this paper shows the transformation and actuality of the Tu family's kinship organization. The paper highlights the importance of once again holding large ceremonies to honor the ancestors as well as continuously conserving and documenting lineage. As such, the relationship is strengthened and the family's ceremonies can continue, which can be considered an important part of ethnic culture. For Manchu's society, activities such as ancestor worship could add new functions and significance, which could provide possibilities to develop a kinship organization.

Keyword

Manchu, kinship organization, transformation and actuality

はじめに

1950年代の土地改革をはじめ、満族の伝統的な親族組織は政治的、経済的環境の変化に深い影響を受けて顕著な変化が起こった。本稿では、下房子村における満族の親族組織に関する歴史的背景、変化のプロセスを概観する。

下房子村には、満族の家族は同居同財の生活を営んでいた。1950・1980年代に直系家族、核家族が急速に増加して主な家族構成になった。このような背景において、満族の中で、新しい社会環境に対応する生き方が生み出されるようになった。本稿では、筆者自身による現地調査をもとに、下房子村における満族の親族組織の変化を明らかにし、新しい動きから今後の可能性についても考察する。

一. 調査地の概況

第一章では、主に自然、政治、行政及び人口などの側面から調査地である下房子村を概観する。

1.1 自然環境

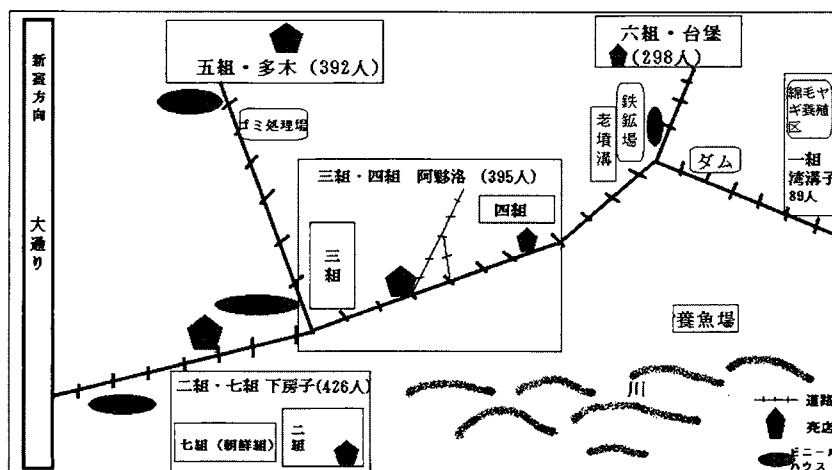
永陵鎮は東経128° 18′, 北緯41° 43′にあり、東北地方の遼寧省撫順市新賓満族自治県の中部に位置する。面積が515.8km²である。そのうち、耕地面積は38.67km², 森林面積は386.67km²を占めている。永陵鎮は北温帯季節性大陸気候に属し、降水量が豊富で、平均年降水量は750～850mm, 無霜期間が約150日である。農産物は主に米, トウモロコシ及び大豆を中心に栽培される。

下房子村は永陵鎮に属し、永陵鎮政府所在地の東方72km離れたところにあり、東南方向に走る道路沿いに位置する。村の面積は24km²あり、そのうち森林面積1.67km², 耕地面積2.33km² (水田1.13km², 畑1.2km²) である。村の中はコンクリート道路, 街灯, 緑地帯などの設備が整えられている。農業設備としては、灌漑用水のダムが一ヵ所, ビニールハウス100個, 綿毛ヤギ養殖区一ヵ所が設置されている。

1.2 政策変遷

中華人民共和国が成立した後、中央政府は農業

図1 下房子村の構成



出所：筆者作成（2015年）

政策について、農業集団化を執り行い、互助組や初高級合作社などの方針を実行した。永陵鎮下房子村においても、以下のような一連の政策が及んだ。

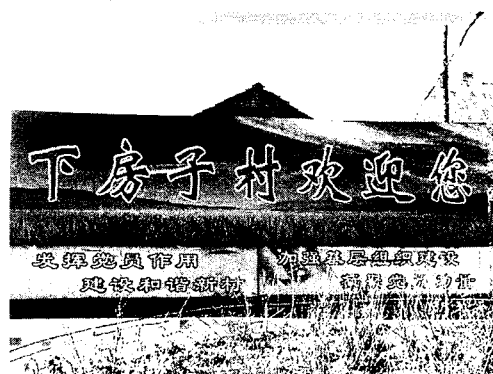
- 1951年、互助組成立
- 1957年、初級農業生産合作社から高級農業生産合作社へ
農業、手工業、私営資本主義工商業に対する社会主義改造
- 1958年、高級農業生産合作社から人民公社へ
- 1966年、文化大革命
- 1978年、改革開放
- 1982年、家庭生産請負制
- 1983年、人民公社廃止
- 2002年、『土地承包法』
- 2006年、農業税廃止

農業集団化政策の基本理念は農民が生産隊に編入され、統一生産、統一分配するというものである。当時、下房子村の経済活動は農業が中心であった。農業生産では、生産内容と生産量が決められ、全ての労働はみな共同で行う。毎年一回、工分¹を計算して給料を支払う。家の工分を増やすため、女性も農作業に参加するようになった。作業はほぼ人力で行われ、かつ集団作業の効率が低いため、生産性は低かった。さらに、下房子大隊では学校や食堂などの人民公社事業を運営し、農民の負担が増加した。農民はトウモロコシの粥、山菜、芋などばかり食べ、腹一杯にならない日々を過ごした。

十一届三中全会（1978年）以来、中国全国において経済改革が実施された。改革はまず農村から始められ、農村経済改革の核心は「家庭聯産承包制」²であった。下房子村では農民たちはこの制度のことを「単干」³と言った。単干以降、農民の生活は大きな変容を見せた。

単干ではまず、土地を農民に分配し、食糧問題を解決した。単干の第一歩は各小組を単位として、小組内の土地を人数分に即して平等に分配することである。すなわち、農民は資金を支払わずに、

写真1 下房子村にある来客を歓迎する看板



出所：筆者撮影（2014年11月、下房子村）

土地を使えるようになった。村民たちは自家の土地を耕作することになったために、生産量はかなり向上し、家族の食糧問題はほぼ解決した。

2000年以降になると、下房子村でも土地に頼って生きる農民はしだいに減少してきた。しかし、農業の収入は少なかったわけではない。また、国家は農民を支援する農業政策を増やし、農業に関する税金を免除した上で、農地への手当を支給するようになった。一方、土地の束縛から解放され、商売をしたり、全国各地域へ出稼ぎに行ったりする人が徐々に増えていくこととなった。

1.3 行政組織

1958年、下房子村では社会主義農業経済が実施され、下房子生産隊大隊が成立し、永陵人民公社に属することになった。生産隊¹の時代には、下房子生産大隊の下は七つの生産小隊（台宝小隊と鮮族小隊を含めて）に分けられていた。1962年に、七つの小隊のうち、人口が最も多い台宝小隊を大隊から離脱させ、台宝大隊を成立させた。また、1982年になると、鮮族小隊も独立して、一つの大隊になった。

1983年、国家による「撤隊建村政策」に応じて、下房子村委会が設置され、永陵鎮政府に管轄されるようになった。生産大隊が解体されると、それに代わるものとして村委会が成立したが、七つの小隊の区分はそのまま残されていて、呼び方は小組に変更された。それぞれの名称は、第一組を穹

写真2 下房子村の村政府



出所：筆者撮影（2015年1月）

写真3 阿伙洛組



出所：筆者撮影（2015年1月）

沟子，第二組を下房子，第三組と第四組を阿伙洛，第五組を多木，第六組を台宝，第七組を鮮族という。

1991年，近隣の比較的大規模な大隊である夏園大隊が夏園郷に昇格したため，下房子を含む隣の五村を合併することとなった。そのため，下房子村は夏園郷政府に従属することになった。しかし，1998年に行政負担を軽減化させるという目的の合郷併鎮計画によって，下房子村は再び永陵鎮の管轄下に戻されることになった。

その後，合郷併鎮政策によって，2000年に台宝村は一つの小組として再び下房子村に編入された。2002年に鮮族村も下房子村の七組になった。したがって，今日の下房子村は新賓県永陵鎮に所属し，下房子漢，台宝，下房子鮮という三つの村落が合併したものであり，五つの自然屯⁵，また七つの居民組⁶から構成されることとなった。

現在の下房子村の行政組織は，中国共産党支部委員会と村民自治委員会からなり，簡称化して中国共産党支部委員会を「村支部」，村民自治委員会を「村委会」と言う。「村支部」は国家機関であり，党の政策を宣伝し，かつ実現化する機能や働きを担い，党支部書記，副書記，組織委員など

の成員によって構成される。これに対して，「村委会」は民主選挙によって成立する村民の自治組織である。政府に協力するという性質や機能を有し，村長，副村長，婦人主任⁷，文書⁸係，会計・出納⁹係などを設置する。

1.4 人口

下房子村の戸籍（2013年）には，497戸，1,579人（男775人，女804人）が登録され，満族，漢族，朝鮮族が混住している村落である。2000年，2005年の二回，人口は大幅に増加している。その原因は台宝村及び朝鮮村を編入したことによる。その他の年は，村の総人口，各小組の人口ともあまり変化が見えない。この原因は計画生育政策の実施及び戸籍管理と深く関わっていると考えられる。

2015年現在，下房子村の戸籍には1600人近くが登録されているが，実際には下房子村に暮らす人の数はその半分ぐらいしかいない。一部の人は子供の就学のために，子供に付き添って県や市へ移住している。また，出稼ぎのために長く家を留守にする者たちが最も多い。労働能力を有する20～50代前後の人は撫順や瀋陽のような省内近距離の大都市だけではなく，ほかの省，また韓国，イタ

リア、スペインなど外国にまで行く人も少なくなる。一方、少数ではあるが、約10人の空掛戸がいる。空掛戸とは数年間連絡が取れず、完全に村とつながりを断っている状態にある人々のことである。人口を調査する際には、空掛戸の数を入れて計算するが、実際に空掛戸は村民ではないと見なされる。

1.5 計画生育政策¹⁰

計画生育政策は1970年代にはじまった。下房子村でも計画生育政策を執行し、子供の出生数をかなり抑制している。この政策の下で第二子の出産を望む場合は、「二胎¹¹ 出産」の申請が必要である。その認可は少数民族、農村戸籍、夫婦が一人子であるかどうかなどを条件にして判断する。

計画生育政策に違反すると罰金を払うことになる。80年代頃、一部の村民はこの計画生育政策を受け入れず、相変わらず二子、または三子を出産していた。そのため、政府は罰金制度を設置し、違反者の公表、税金や社会保障での待遇格差をつけるなど、対策の強化をした。

1990年代頃から、計画生育に関するそれぞれの政策は熟成し、管理システムも本格化された。夫婦は結婚する時から、子供が成人するまで、たくさんの手続きを済ませることになる。特に、生育指標については厳格な監督を行い、毎月の産児制限措置を計る。整備された計画生育政策は効果をもたらし、ほとんどの村民は規定以上の出産を避けるようになった。

この政策は医療や経済などの面において、村民たちにとって恵まれたプログラムも含まれている。たとえば、子供の健康を保つために、妊優検査というプログラムが設置された。また、計画生育政策に参加して正しく守ってきた夫婦は60歳になると、毎年200人民元の手当を受ける。近年、人口数がうまく抑制され、計画生育政策は人口の状況に合わせて、徐々に調整されている。最初の一人っ子政策から、例外的な二胎出産へ変化し、さらに二胎出産の条件も年々緩やかになってきた。

二. 下房子村の親族組織

以上のような自然環境や政治政策は親族組織に直接的な影響を与えた。二節では、上述した背景の下に下房子村における親族組織の変化について述べる。

2.1 1950年代前の親族組織

1950年代に、中国の農村において本格的に実施された土地改革は、近現代に入って以来、中国の農民にとって多大な影響を与えた。また、その後、急速に進められた一連の農業集団化政策も農村部のあらゆる方面に変化をもたらした。農村に対する社会主義改革は農業の生産形態に止まらず、家族や個人まで波及した。

1950年代前には、下房子村の満族の家族は平等相続、土地共有、同居同財という原則を持っていた。彼らは昔から三世代、四世代の同居を主な居住形態にしてきた。家長が生きている間、兄弟は結婚しても分家せず、嫁を迎え入れて共同生活をした。家族の成員たちは緊密に結束していた。家は三間か五間の部屋からなり、真中には台所を設置し、両側の部屋を寝室として利用した。

当時、常に人数が多くて、部屋の空間が狭かったが、人々は個人のプライバシーを重視する余裕がないし、その意識も薄かった。また、庭も開放的な空間のように造られ、家族成員や隣の家との交流がかなり盛んであった。例1、例2はA氏(男、1934年)、B氏(1941年)の当時の居住状態への思いである。

事例1：

A氏の場合は、子供の頃に、曾祖父と同じ部屋に住んでいた。曾祖父には息子が三人いて、A氏の祖父は第三番目の息子である。寝室には長いオンドルがあり、家族はその上に寝て、箆箆で空間を分割していた。曾祖父が生きていた間、みながこのような状態で共住していた。

事例2：

当時、結婚しても新しい家建てる経済力がなかったため、B氏の家では、ひとりの同じ祖父のすべ

ての家族成員は共同生活をしていた。農作業は兄弟たちによって協力して行われ、食事や家事なども順番で担当した。B氏と妻は、1962年に結婚したが、1983年になりやっと自らの家を建ち上げた。

長年の間、このような同居同財の生活形態は基本的に維持されていたが、社会全体の変化の中で次第に変わってきた。特に、1950年代以降、その崩壊は早いスピードで促進してきた。

2.2 土地改革及び農業集団化時代の親族組織

下房子村では、1951年の互助組の成立を始めてとして、社会主義改造の幕が開けた。経済面においては、土地改革によって、各家を単位として土地を平等で農民に分けた。そして、各家の土地、祠堂、祭田などあらゆる共有財産が没収された。農業生産合作社や人民公社の時代に入ると、生産、生活資料がすべて集団から統一的に分配された。下房子村を六つの生産小隊に分け、村民は農業を中心に仕事が分配され、工業など他の生業がほとんど発展せず、食糧は欠乏していた。この背景において、村人は当時の生活や人間関係を例1、例2のように述べた。

事例1：

C氏（男、1946年）によると、50年代には、全ては土草房、土道、泥がいっぱい、食べ物は大根とトウモロコシ粉だった。私は、祖父、両親、姉、二人の弟及び妹と一緒に暮らしていた。あの時に、皆は一緒でした。他の家もそうだった。現在、みなは一緒にいなくて、結婚で離れた。

事例2：

D氏（男、1942年）によると、あの頃、生活はみんなと同じ生活程度だった。お腹一杯食べられる時代ではなかった。まず、経済的には制限があって、うちは春節でもせいぜい3kgの小麦粉しかもらえなく、肉が無かった。すべてのものが少なかったから、いろいろな祭祀や付き合いはあの頃から徐々になくなった。昔、自分で豚を飼って、祭祀には豚を殺し、祭りを行うことができた。親族や友人も、互いに付き合いが少なくなった。相手の家に行くと、手持ちの食べ物が少ないため、

招待することができないし、迷惑であるから。みんなはお互いの交際も無くなり、冷淡になってしまった。

一方、政治的な面において、伝統的な儒教教育の代わりに階級意識の宣伝を推進し、宗族意識が批判された。これに対して、下房子村の元幹部は、「当時、家はめちゃくちゃでした。生産隊からもらったものを置く場所さえあればいいと思われた。よく会議があって、夜になったら会議を行い、思想を整え、教育を受けた」と回想した。その結果、村人は族譜、位牌を処分し、祭祀活動が中止され、親族組織が次第に破壊され、親族間の人間関係にも影響が及ぼされた。

下房子村で、大家族と言え、図家と趙家という二つの家がある。図家と趙家はいずれも満族に属し、当時の階級成分では地主と判定された家である。その中で、図家は最も家族が多く、沢山の土地を持っていた。土地改革が正式に始まる前、図家の一部の人が村から四川省、甘粛省へ逃げた。長年行方不明になり、村との連絡が無かった。これに対して、大部分の図家の人はそのまま残って、土地分配を経て集団労働に参加していた。彼らは共同の祖父を持つ人々が互いに付き合ったが、それ以上、他人との付き合いは少なかった。

一連の改革が進行される間に、家族の居住形態はあまり顕著な変化がなかった。しかし、親族関係を支える経済的、政治的な基盤が改革によって崩壊した。集団体制下において家族間の依存の必要性が弱くなり、親族に対する認識にも変化が見られるようになった。

2.3 改革開放後の親族組織

1980年代頃、改革開放が始まり、人民公社が廃止され、農村では生産責任制度が執り行われるようになった。さらに、2000年以降には新しい土地政策や農業税廃止など農業を支援する政策も次々と実施されてきた。新しい環境の中で、親族組織は主に二つの面から影響を受けた。

まず、生産効率がかなり高まり、農民は豊かになり、分家の経済条件が整えられた。若者は結婚

するとすぐ親元を離れ、独立するようになった。下房子村には、80年代後半に新築の家が相次いで現われた。

次に、市場経済の下に、農民は土地から解放され、出稼ぎが増えていく。過去と比べれば、現在、農民の労働意欲が高くなって経済もよくなったが、人々の心が荒んできた。労働に従事しないものにとって、基本的な生活保障が全くなかった。このように、彼らは激しい経済競争に巻き込まれ、伝統的な親族親に代わって金を中心にする現実主義的な観念を生み出した。

つまり、社会主義近代化政策は親族組織に対して直接に影響を与えた。分家はその経済、政治及び思想の条件がすべて整えられ、分家するのに有利な環境を提供された。直系家族、核家族の発展は速かった。親族組織が最も変化した時期を迎えた。

この時期において、上述した図家は依然として村の中では最も規模が大きい氏族であった。彼らは主に第三、四組の阿伙洛に集中して住んでいた。阿伙洛には120戸がいたが、その中で図家は約30戸を占めていた。1980年代に甘粛省まで逃げた図家の子孫は村に戻って墓参りをする者がいた。次の章では、時代の流れの中でこの図家の親族組織が如何に変化したのか、また現在どのような状態にあるのかを明らかにする。

三、図家の親族組織

本節では、図家を対象にし、彼らが日常生活に行うさまざまな祖先祭祀を呈示する。そして、この事例に見てとれる親族組織の特徴を分析し、変化の様子を検討する。

3.1 図家の歴史

図家の満族姓は喜塔羅氏である。喜塔羅氏族の歴史を遡ると、明朝の中期に、一世祖（初代）の昂文都里巴彦徳は家族を連れて長白山の喜塔羅地域に移住した。そこで土地を開墾して定住したことにより、喜塔羅という地名を族名にした。昂文都

里巴彦徳は息子七人を授かって、喜塔羅氏は七大分枝に形成され、子孫が繁栄し、満族でも指折りの大家族の一つに発展した。順治元年(1644年)、二世祖都力根の子孫は盛京に駐屯し、福陵を守ることを命じられたため、東北に残った。その他の六分枝の子孫は「從龍入関」によって、順治皇帝に従い北京に移動した。そしてまた、北京から四川、河南及び甘粛など全国の様々な地域へ駐屯にいった。

結局、東北地域に残ったのは都力根の一枝の子孫しかいなかった。この一枝は、第九世代の時に、九世祖倭合が鑲紅旗協領二品頂戴の官職を授かる。倭合は七人の息子がいたが、康熙二十六年(1687年)に彼の官職が第二子の図黒に世襲された。その後、図黒は永陵の防衛章京として新賓地域に転職することになった。当時、彼は九人の息子がいたが、その中の五人を福陵に残し、四男、七男、八男、九男及び甥一人を新賓に連れてきた。この図黒が喜塔羅氏の第十世祖であり、新賓地域における喜塔羅氏子孫の直系祖先でもある。

3.2 図家の現状

現在、図黒を祖とする賓地域の喜塔羅氏族はすでに十世代以上続いている。しかし、満族の姓が漢族姓のように簡略化される過程において、喜塔羅氏族も固定の漢族姓に改姓されるようになった。新賓地域の喜塔羅氏は筆者の調査した限り、主に図、趙、文、衡、祝などの姓をもって命名されている。また、新賓から離れ、遼寧省内の他の都市、黒龍江省、甘粛省などへ移住した人も少ない。

調査地下房子村に暮らしている満族の氏族の中で、人口が最も多いのは図という姓の喜塔羅氏の後裔である。図家は十世祖図黒の時代から下房子村にきて、今日の二十四世代まで続いている。過去、図家は統一の姓がなかった。TYF氏の祖父の時に、一族をここに連れてきた図黒の子孫であることにより、図黒の図を姓にして一族の姓が固定化された。

図家の21世代後裔であるTYF氏（1941年生、

75歳)の記憶によると、曾祖父の時代には、昔の家は土房であり、三間の狭い部屋に曾祖父、祖父、父親と子供の四世代が一緒に暮らしていた。曾祖父は息子三人とそれぞれの妻、子供たちを連れて、みんなで土地を耕作し、大家族の生活を維持した。寝室には広いオンドルが一つあり、真中に箆箭を置いてみんなで住んでいた。

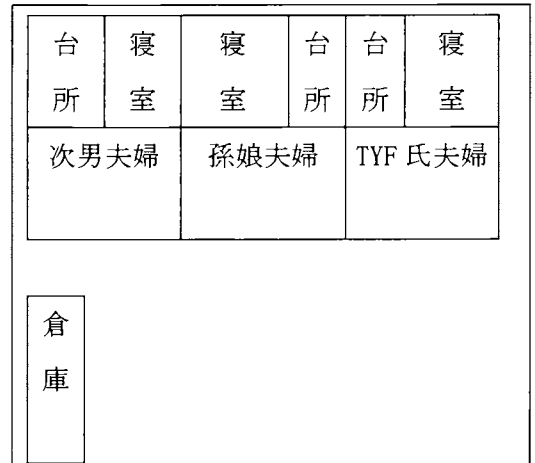
その後、祖父の時代になると、昔の大家族は主に祖父の兄弟それぞれを単位として分散するようになった。祝事や祖先祭祀などのイベントも同じ祖父の子孫が集まって行われるようになった。TYF氏の祖父は兄弟三人で、二人の兄がいた。長兄は二人の子供をつれて、下房子村を離れた。下房子村に残った図家は二つのグループに分かれ、近くに住んでいた。そして、同じ祖父の子孫と一緒に暮らすようになった。彼らは一緒に生計を立て、順番で家事を担当した。

TYF氏は1941年新賓県に生まれ、五人兄弟の長男であり、姉、弟と妹二人がいる。1950年代土地改革から農業集団化が終わる時期に至るまで、TYF氏は祖父、親、未婚の兄弟など合わせて10人ぐらいと一緒に生活していた。彼は1962年に結婚し、当時、新しい家を作る能力がないため、嫁を迎え入れ、そのまま共同で生活していた。その後、TYF氏夫婦は4人(女2, 男2)の子供をもうけたが、長女を姉の家に養子に出した。他のすべての家と同じように生産隊に働くことで、食糧と生活用品を貰った。

改革開放の時期に単干が始まった。1987年5月に、経済状況がよくなったTYF氏はやっと独立し、自らの家を建てた。現在の家は、部屋が三つあり、建築費用1000元、工期1か月ほどでできたものであるという。TYF氏夫婦は次男夫婦及び孫娘夫婦、曾外孫と合わせて七人が住んでいる。しかし、食事と生計はそれぞれ独立している。他の子どもは結婚する際に、新しい家を建て、すべて自立した。

TYF氏の兄弟は80年代から、結婚を機会にあっていつい実家を離れた。現在、一人の妹が永陵鎮内に定住しているほかは、兄弟四人共に下房子村

図2 図家の平面図



出所：筆者作成

に住んでいる。彼らは頻繁に行き来していない。春節の際に、大晦日を家ごとに祝い、翌日の一日はTYF氏の家に来て祖先を祭る。年二回の墓参りも共同で執り行う。それ以外は、誰かの家で結婚、葬式、出産、新築及び進学などのような社会的活動があり、知らせがあれば、祝い金を出して互いに賑わすために参加する。

3.3 祖先祭祀

祖先祭祀は墓と祖宗板子¹²の二つを中心とした家族共同の行事である。図家の祖墳は泰平溝というところにある。昔は、毎年旧暦7月22日に祖先を祀るために家祭を行い、元気な雄豚を殺し、煮てから祖先に供えていた。図家では昔祖宗板子というものを祀っていたが、文化大革命の時に、焼失した。現在、家に祀られている祖宗板子は80年代に複製されたもので、祖先神を代表する祖宗板子が九枚そろって、通称「老祖宗」と言う。それを祀る際に達子香が祖宗板子の数に合わせて9本用意されるが、さらにもう1本が必要である。それは長仙(蛇仙)にも献げられる。達子香の他にはお酒3杯、箸3膳、饅頭を5個ずつで3つの山が必要である。

現在、祭祀は4月5日の清明節と旧暦7月15日の鬼節の年二回に決まっている。墓参りはほぼ祖

父を同じくする人を中心に行われ、自らを愛育してくれた祖先を祭る。図家では一族共同の祭祀活動が何十年間中止され、図家の老墳を管理するのはTYF氏夫婦しかいない。TYF氏は、昔に比べれば、人々の祭祀を重要視する意識が薄くなり、みなが自分の祖父を祀り、祖墳を無視して、祭祀の人員も内容も簡略化されているように見えると語った。このような状況は2002年まで続いていた。

2000年に、長く中止された祭祀がある事件によって再開する転機があった。当時、下房子村では鉾山の開発が始まった。この鉾山は図家の祖墳の右側にあり、図家の墳地の一部分を占拠し出たゴミをも墳地に放置した。鉾山会社の行為が図家の祖先に対して非常に不敬なことであると思われた。とくに鉾山の開発のため、墓の後ろに水溝を掘ったり、樹木を伐採したりすることは、図家にとって祖墳の風水を破壊するタブーである。

以上のような事件が起こって、TYF氏夫婦は下房子村及び夏園子など近い村の図家を連合して、鉾山会社の行為に強く反対し、祖墳の破壊を止めようとした。そのため、彼らは、何回も村の道路を阻み、鉾山の運送を止めた。また、村長に訴え、政府側の支援を求めた。図家と鉄鉾との交渉は一年間半続いた。その結果、村政府の調停によって鉾山会社から図家の墳地に踏み込まない旨の確約及び5000元の賠償金が付与された。

2002年8月22日に、TYF氏はこの賠償金を使って、祖先及び墳地全体の石碑を立て、一族の祭祀を開催した。この祭祀について、TYF氏は「われわれは爆竹、紙銭、供え物を買って、庭で食事会をした。電話でみんなに知らせを出した。普段、あまり連絡がとれないが、集まったら輩分¹³を論じてきた。参加した人は100を超えたが、今度の祭祀でみんなが祖墳のことを知った。5000元以上を費した。自らの金を使っても嬉しかった」と語った。そして、2002年の祭祀以来、2015年まで大規模な祭祀を行わなかった。しかし、清明節の際に村外からの子孫が祖墳を祀りに現われるようになる。

2015年の清明節に、図家は第二回の大規模な祖先祭祀を執り行った。祭祀は4月3日、4日にTYF氏の家で行われ、参加に来た人は新賓県、撫順市、瀋陽市などの地域から約80人がいる。満族の清明節と言えば、墓参りをするものであるが、今回の祭祀は主に族譜、祖先板子、索羅杆子¹⁴を祀り、墓参りおよび食事会からなる。図家は新しい索羅杆子を立て、米と新鮮な豚の内臓をその上に供え、カラスに食べさせるよう、索羅杆子を祀る儀礼が復活された。また、清明節の際にはふつう族譜や祖先板子などを祀らないが、今回は一族にとって盛大な祭祀であるため、特別に祀ることにした。

写真4 親族の記念写真



出所：筆者撮影（2015年4月4日、図家）

写真5 索羅杆子



出所：筆者撮影（2015年4月4日）

写真6 図黒のお墓



出所：筆者撮影（2015年4月4日）

3.4 族譜と統譜

上述した二回の祖先祭祀には何れも図家の子孫がたくさん集まった。図家では、一番上の世代と一番若い世代の二人は七世代をへだてる。彼らは出会った時に、まず互いに世代関係を確認するため、族譜に記録されている相手の範字を聞いて判断する。

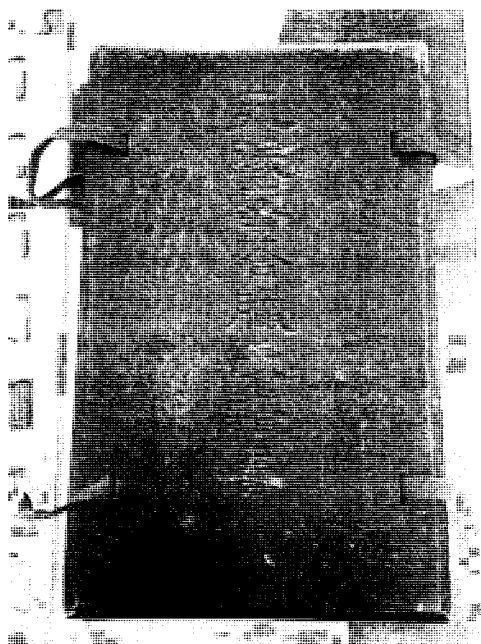
TYF氏の族譜は文化大革命の時代に禁止されたため、燃やされた。その後、譜単と呼ばれる家系図だけを残している。この譜単は吉林省の親族の家から書き写したものである。TYF氏は、歴史的混乱の中で族譜がまだ親族の誰かの家に残っていると思って、5, 6年前から、族譜を探し始めた。2015年2月春節の時に、TYF氏はある親族の家を訪ねて話した際に、やっと族譜に関する正しい情報を得、瀋陽市にいる親族から族譜を借りてもらった。その中には、氏族名の由来、新賓に移住する時期、祖先の名前および祖墳の情報などが記載されている。最後は20字の範字が記録されている。

TYF氏はやっと手に入れた族譜を大切に保管

するだけでなく、30部を複製して祭祀の時にそれをみんなに回覧させ、それを欲しい人に配った。彼の話によると、族譜には家族の歴史があり、一世代一世代の由来がある。彼は歴史を研究するとはまでは言えないが、「樹有根、水有源（樹は根があり、水は源がある）」と思いながら、特に清王朝の歴史に興味を持っている。

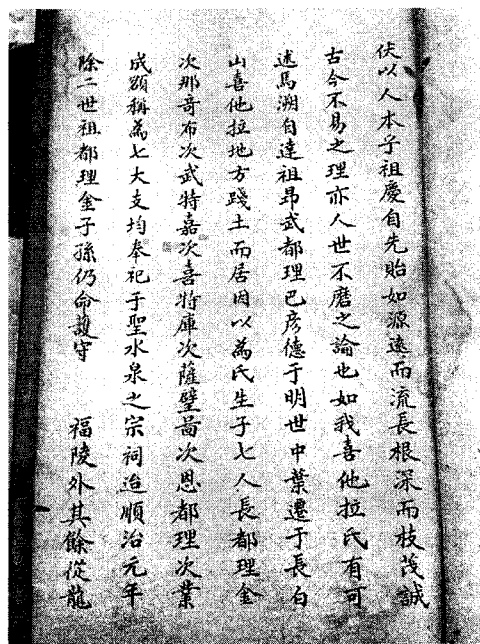
二回の祭祀活動を通じて、TYF氏夫婦には新しい考えが生まれた。彼らは族譜を書き続けようとしている。長年中断し、一族の移住、連絡の過疎及び学力の限界などの理由で、族譜を補充する作業はかなり難しいと想定される。TYF氏は努力を尽くし、出来る範囲内で家族の情報を集め、族譜に添付することを計画している。2015年5月の調査時点で、TYF氏夫婦は一つの地域で比較的情報収集能力ある人を一人か二人選び、その人を中心にまわりの図家の情報を集めることを依頼した。新賓県内における近い家であれば、TYF氏夫婦はその親戚の家まで訪ね、市外や県外の場合は電話で連絡し、統譜の目的とやり方を説明した。現在、図家の統譜作成はどれほど進んだか確

写真7 図家の族譜



出所：筆者撮影（2015年4月4日）

写真8 図家の族譜の中身



出所：筆者撮影（2015年4月4日）

認していないが、今後も引き続き見まもってきたい。

四．考察

前節では、下房子村における満族の親族組織に関する歴史的背景、発展変化を概観した。また、図家の事例により親族組織の実態と新しい動きなどを示した。以上を踏まえ、満族の親族組織の現状及び今後の可能性について考察を試みる。

昔、満族の中で、多くの家は同居同財の大家族で、娘は結婚すると家族を離れるが、息子が残り、妻を迎え入れて共同生活をしていた。しかし、土地改革から改革開放に至るまでの40年間に、政治的、経済的変化の影響を受け、親族組織に顕著な変化が表われた。その中で、土地改革による土地私有の廃止、農業集団化による伝統的家族観念の弱化、及び改革開放による価値観の変化が確認される。

聶莉莉がその著作『劉堡—中国東北地方の宗族とその変容』の中で指摘したように、土地改革以

降には、漢民族の社会においても、親族間の付き合いが禁止され、社会階層の構造と親族の構造との関連が希薄化されるようになった。また、人民公社時代になると、劉堡の大家族はすべて解体され、核家族が基本的な家族構造となった。そして、親子関係も変わった。息子は結婚すると、親から独立する傾向が増えた。この独立は伝統的な「分家」と異なり、親は結婚した息子に生活用品を贈与するだけのようなものになった。

聶莉莉の論述を踏まえ、当時、満族は一つの少数民族として位置づけられていたが、社会的改革の面において、漢族社会と同様な社会的改革政策に染まってきた。親族組織や家族構造には、ほぼ同じような社会的変化が起こった。

下房子村では、1950年代と1980年代の二つの時期に分家を行った家が多く、直系家族、核家族の比率は急速に増加した。現在では、核家族が主な家族構成になった。図家では、TYF氏夫婦、次男夫婦及び孫娘夫婦、曾外孫と合わせて四世代が一緒に住んでいるが、経済的には独立し、食事を三つの家庭ごとに行う。このように、直系家族と

核家族の間から生み出された新しいライフスタイルが現われた。

1980年代以降、農村部の若者は進学や出稼ぎなどの新たな選択肢が増えた。彼らは出稼ぎで長く村を留守にしたり、村を離れて都市に移住したりするようになった。しかし、親はこのような状況を予測できず、家を建てた時に相変わらず子供の部屋を造った。そのため、下房子村には年寄りと小さい子供だけが生活していて、家にはがら空きの部屋がよく見られる。親が息子の誰かと一緒に住むという考え方はまだ変わらないうちに、農村におけるライフスタイルが早く変わったからである。

一方、1950年代以来、新しい社会環境において親族間の付き合いがかなり減少し、家族は疎遠になった。満族では大規模な祭祀はほとんど行われることがない。祖先祭祀は私的な儀礼になって、個人または同じ祖父の子孫によって行われ、そのやり方が簡略化しつつあり、消失することさえあった。つまり、家族のつながりが薄くなって、祖先祭祀の機能も内容も失われた部分があった。

しかし、満族は昔から祖先祭祀を重視している。彼らは祖先板子、祖墳、族譜及び動物神を媒介にして祖先に対する尊崇を伝え、祖先から家族の繁栄と保護をもらうという願いを達成しようとする。祖先祭祀は一族を結び付け、家族の結束を強める役割を果たしている。

先の図家の場合は、祖墳を保護することをきっかけに、大規模な祖先祭祀が再開され、族譜の複製、統写する動きが現れた。これを機にし、一族は再び連絡が取れて、共通の祖先を偲ぶようになった。特に、今まで顔を知らなかった親族は祭祀の際に初めて会って、世代を尋ね互いの関係を確かめてから、共通の祖先を思ったり、親族の話をしたりするのは印象的だった。また、祭祀の対象は三代以内の近い祖先に限らず、最も遠い祖先のことをもっと大事にすることも図家の特徴である。

一方、清明節は墓参りに限っているが、今回の祭祀では、祖宗板子、索羅杆子及び族譜などの要

素も加えられた。TYF氏の話によれば、「我々は満族である、満族の風俗を続けるべきである。今回は一族の祭祀だから、全てを祀った」と語った。祖先に関わるそれぞれの祭祀は元々の意味や解釈に関わらず、一族の祭祀として民族的特徴を表わすために執り行われたと言える。

昔の祭祀について、小熊(1996:124-133)は「祖先を祀る満族の最も重要な儀礼を大祭あるいは年祭という。この儀礼を家祭という場合もある。この儀礼は通常三日間行われ、祭祖・背灯祭¹⁵・祭天の内容が包容された祭祀である」と指摘している。当時の祭祀はシャーマンによって執り行われ、三日間に豚を殺し、祖先の位牌、女性神(背灯祭)、天神(索羅杆子)及び仏托媽媽などを祀るものであった。

図家の祭祀には、祖先板子と索羅杆子の二つの儀礼が行われ、豚を殺したり、背灯祭、仏托媽媽を祀ったりすることが見られなかった。そして、清明節の日に、索羅杆子という祭天儀礼を復活した。しかし、昔、索羅杆子を通じて供え物を天に届け、天神と人間がつながり、人間の祝福と祈願を伝えた。現在、彼らは索羅杆子を再開しても、天を祭る機能を求めるのではなく、それが民族伝統の一つの象徴と見なされ、自らが満族の一員であることを示そうとするからである。つまり、現在、祖先祭祀は自らの属する民族の誇りをアピールする新しい機能を果たすようになった。

おわりに

1950年代の土地改革の施行に従い、村人の家族に対する依存的な関係は、国や集団に対する依存的な関係に代わった。家族組織は政治的な要因で大きく変り、しだいに弱体化した。その後、改革開放により、農地が各世帯に分配されることによって大きな親族組織を維持する経済的な基盤が崩壊し、村人の価値観が次第に変わった。これに対して、近年、祖先祭祀を中心とする伝統的な儀礼が復活する傾向が現われた。墓参りなどの祭祀活動は盛んに行われ、大規模な祖先祭祀を再開す

る家も見られるようになった。実際、現在の祭祀活動は主に中心人物の存在、各家の経済力などの面によってより多く左右されている。

今回の調査において、祖先祭祀は満族の特徴として、重要な文化資源と見なされるようになった。満族はその価値を意識しながら、祖先祭祀を復活させ、祖先祭祀は再び彼らの生活の中に溶け込むようになった。彼らは、祖先祭祀を通じて家族の歴史を認識し、満族社会の結束力も高められるようになった。

今後、親族組織の改善及び民族文化の強調という二つの側面から、祖先祭祀は現代の満族社会において、どのような立場に置かれるのか、また、どのような役を演じるのかを注目していきたい。

【注】

- 1 工分とは労働点数である。工分の決定方法は、一人につき労働力の強弱、技術の高低をもとに基礎点を決め、基礎点と一定時間内で実際に労働した質と量を根拠として評議する。工分は生産隊から支給された食糧に相当する分を差し引いて計算する。実際に手に入る工分は差し引かれた残りの一部分だけである。
- 2 家庭聯産承包制とは農家で請負する生産責任制度、俗称「大包干」と言う。
- 3 単干とは集団ではなく、個人が単独で生産を行う意味である。
- 4 生産隊とは、人民公社時代の農村の末端単位である。
- 5 自然屯とは、自然形態的な住民の集落。
- 6 居民組とは、住民グループ。
- 7 婦人主任：村の戸籍、計画生育及び婦人に関する仕事を担当する。
- 8 文書：書類の管理及び財政を振り替えることを担当する。
- 9 会計・出納：財政の記録・計算・管理の担当者。
- 10 計画生育政策：「一人っ子政策」とも言う。人口の抑制を目的に1970年代初頭から始まり、1978年に国策として位置づけられる。中国では、男性が

満22歳、女性が満20歳で結婚することができる。夫婦が一人だけ出産し、晩婚を提唱、遅く生むこと、優生を奨励する。

- 11 二胎：第二子。
- 12 祖宗板子とは祖先や神を象徴する板のことで、部屋の西の壁に祀る。
- 13 輩分とは世代のことである。
- 14 索羅杆子とは、祭天儀礼の神杆である。満族は、庭に神杆を立て、犠牲の豚の内臓を煮て、天神を祀る。
- 15 背灯祭とは、夜に灯を消して静かに女性祖先の霊を呼び返す儀礼である。

【参考文献】

日本語文献・資料

- 小熊誠「満族の家族組織と祖先祭祀」江守五夫・愛新覚羅顕琦編『満族の家族と社会』、第一書房、九十五—一三四、1996。
- 川口幸大・瀬川昌久編『現代中国の宗教—信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂、2013。
- シロコゴロフ、S・M・『満族の社会組織』大間知篤三・他訳、刀江書院、1967。
- 秦兆雄『中国湖北省の一農村社会変化1949年～1993年』東京大学（博士論文）、1993。
- 聶莉莉『劉堡—中国東北地方の宗族とその変容』東京大学出版会、1992。
- 瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂、2012。
- フリードマン、M『中国の宗教と社会』田村克己・他訳、弘文堂、1987。
- フリードマン、M『東南中国の宗族組織』末成道男・他訳、弘文堂、1992。
- 吉田世津子『中央アジア農村の親族ネットワーク』風響社、2004。
- 劉正愛『民族生成の歴史人類学』風響社、2006。
- 渡邊欣雄編『環中国海の民俗と文化—3 祖先祭祀』、凱風社、1989。

中国語文献・資料

- 『民族問題五種叢書』遼寧省編輯委員會編『満族社会歴史調査』民族出版社、2009。
- 鮑明『満族文化模式・満族社会組織と觀念体系研究』遼寧民族出版社、2005。
- 國務院人口普查辦公室編『中国2010年人口普查資料』

中国統計出版社, 2012。

範麗珠『宗教社会学－宗教与中国』時事出版社,
2010。

郝時遠・他『中国少数民族現状与發展調查研究叢書・
新賓県満族卷』民族出版社, 2008。

遼寧省編集委員会編『満族社会歴史調査』遼寧人民
出版社, 1985。

新賓満族自治县概況編写組『新賓満族自治县概況』
民族出版社, 2009。

楊慶堃『中国社会的宗教』範麗珠訳, 世紀出版社,
2007。